

グローバル時代の中で考える —日本人としてのアイデンティティに めざめよう



渡辺利夫

多文化共生か多文明共生か

ヒト、モノ、カネ、情報がグローバルな規模で世界を自由に移動する時代の到来です。世界の歴史の中でもまったく初めてのことですから、この時代を私どもがどういう心構えで迎えたらいいか、実に難しい問いかけです。

さまざまな資源が世界各国間を一段と自由に移動しています。これが、各国、ひいては世界全体の繁栄をもたらす要因となるのか。いやその反対に、ある国に生じた失政や災害が世界全体を巻き込んでいく危険な可能性もあるのです。

後者についていえば、現在、湖北省武漢で発生し

た新型コロナウイルス汚染が中国全土に拡散し、さらに韓国や日本など近隣諸国のみならず、イタリアなどの欧州諸国にまで及んで深刻な事態を招きつつあります。グローバル時代以前であれば想像さえできなかつたことです。

グローバル時代の帰結がどうなるのか。予測は大変に困難です。しかし、グローバル化の時代はもはや後退できない段階にまで進んできております。この時代の趨勢に日本とて逆らうことはできません。とすれば、私ども日本人はこの時代をどういう精神をもつて迎えるべきか、このことを真剣に考え

てみる必要があります。

私は日本と日本人がグローバル化の時代を雄々しく乗り切っていくためには、グローバルな時代であればこそ、一段と深く日本の歴史と伝統に思いをいたし、そうして日本人が日本人であることの誇りをもつ。そういう感覚がきわめて重要なことだと考えます。

ものであり、文明は物質的なものです。私どもはよく、一方で「精神文化」といい、他方で「物質文明」という言葉を使いますが、その語感には正しいのではないのでしょうか。ですから多文化共生は容易ではなく、「多文明共生」という観点をもつことが大切だと私は考えます。

「多文化共生社会」といわれますが、文化とは歴史と伝統の中で長い時間をかけて培われた各人種、

民族、国家に固有のもので、これが共生することは難しい。共生できるのは、文化ではなく文明です。

文化はそれぞれの社会で紡がれてきた生活様式、習慣、道徳、芸術などです。これに対して文明とは、技術や法や組織や制度などの人類の叡智として築き

あげられてきたものです。文化がそれぞれの人種、民族、国家に固有なものである一方、文明は人種、民族、国家を超えたより普遍的なものです。

思い切って単純化していえば、文化とは精神的な

日本の国柄について

日本とは他国と異なるどんな固有の体質、つまり「国体」をもった国家なのでしょう。私は日本の

国体は二つのキーワード、一つは「同質的」、二は「連続的」という形容詞で語るのが適切だ、とかねて考えてきました。

日本は四方を海で囲まれた「海洋の共同体」です。同一の国土の中で、ほとんど同種の人々が、他国では使われていない、その意味で孤立的な言語である日本語を用いながら、生を紡いできました。宗教上の争いが日本に亀裂を生じさせたことはありませんでした。第二次大戦直後の一時期、連合国軍総司令部（GHQ）による時期を別にすれば、他国の占領下におかれたことはありません。同種の人々が孤立的言語の日本語を用い、宗教上の亀裂もない「同質社会」、これが日本の大きな特質です。こういう「同質社会」は、世界でも日本以外に探し出すことは難しいのではないのでしょうか。

日本も、古代律令国家の時代にありましては、国家形成のために中国から多くのことを学びました。しかし、唐王朝が滅亡して以来、大陸からの影響力

一二六代にあたります。この「万世一系」の天皇こそ、日本の歴史が、動乱や大逆、外国からの侵略によつて深刻な危機の淵に立たされることなく、連続として紡がれてきたことを証^{あか}しています。このような存在を、他の国々の皇帝や王位の中にみることはできません。

この大いなる共同体、同質的で連続的な歴史を擁する日本という国のありようを、目に見える形として私どもの前に現出させてくれるものが、天皇なのではないでしょうか。現憲法では「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴である」となっています。確かにそういつていいのですが、それだけでは足りません。むしろ、天皇は日本という国家と民族の連綿としてつづく歴史の象徴だといった方が的確であろうと、私は考えます。

明治、大正、昭和、そして平成までが過ぎ去り、今年は今和二年です。「一世一元の制」はまことに優れた「制度設計」です。天皇家の血脈が瞬時たり

は急速に失せていったのです。そして、日本独自の国家秩序が形づくられてきました。七世紀の初めには、天皇という特有の称号と固有の年号が設定されました。そして、国名を「日本」としたのです。以来、一三〇〇年の連綿たる歴史が営まれてきました。繰り返しますが、日本は世界史上に類例をもたない「同質社会」です。

それゆえですが、日本の歴史は「連続的」である一方、中国の歴史はきわだつて「非連続的」です。異民族の征服や反乱、権力内部の大逆や謀反に彩られたものが中国史です。これに比べれば、日本ははるかに平穏な歴史を織り紡いできました。同質的で連続的な歴史をもつ日本人の体質がそうさせたのであろう、と思われまます。日本は「海洋の共同体」なのです。

血脈、天皇、そして日本

今上天皇、つまり現在の日本の天皇陛下は、

とも途絶えることなく紡がれていることが証され、そうして曾祖父父母があり祖父父母があり父母があつて自分が在るといふ私どもの血脈の連続性を、天皇家の血脈の連続性の中に投影することができるからです。限りある個々の人間の人生が代々とつづく血脈の中にある、そういう連続性を私どもに直覚させてくれるのが一世一元の制ではないかと私は考えます。

血脈、天皇そして日本という観点にたつて、みずからの歴史と伝統、みずからのアイデンティティを確立することにより、未来の予測が難しいグローバル時代を迎えようではないか、というのが私の提案です。

(拓殖大学学事顧問)